

# 学校の“怪談”

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年5月21日

娘が都立高校に入学してから1か月たった。「皆が格安ブランドの服を着ていてよかった」とうれしそうに言う。初めは意味がわからなかった。

実は以前に、入った私立中が合わずに不登校に陥り、自分で決めて公立校へ戻った、という経緯がある。その中学で「あのブランドは安っぽい」と言われているのを聞き、普段は制服だが、私服で通す夏の林間学校には持っていかないよう、気をつけたのだそうだ。もちろん原因は一つではないが、これじゃあ不登校にもなるさ、と思った。

桐野夏生の小説『グロテスク』にも、似たような話が出てくる。東電OL殺人事件の被害者がモデルだが、入学した有名女子高で、普通のソックスに高級ブランドの刺しゅうをしたのがばれて、ばかにされる。あの学校の雰囲気よく表しているのよね、とそこの卒業生が感心していた。

それやこれやで憤っていたら、最近、別の私立校の母親の話を聞いた。ブランド品を持っていないと外される、という雰囲気だった。でも高いので、娘のために中古のブランド品専門店で必死にそろえて苦労したという。

実は三校とも、小学校から大学までのエスカレーター式の私立校なので、ウンザリする特殊世界の怪談話、とも言える。しかし同じようなことが、程度の差こそあれ、場所によっては公立小学校でも起きている。ワンポイントの靴下をはいていないという理由で、娘が仲良しグループに入れてもらえなかった、と友人が嘆いていた。

当然のことながら、大人の社会の価値観の反映である。その大勢の雰囲気にのまれ、子どもたちは、“告げ口”になるので教師には話せない。でもばかばかしいことはどんどん言おうね。